特集

佐世保の市

ここ数年、「マルシェ」という言葉をよく耳にするようになりました。マルシェとはフランス語で市(いち)や市場の意味。市内でも春に「SASEBOまちなかマルシェ」や「三ヶ町マルシェ」が行われたほか、有志による小さなマルシェなどが各所で頻繁に行われ、にぎわいを見せています。

佐世保はもともと、毎年行われる早岐茶市(5月～6月)や愛宕市(2月)、常設の戸尾市場街や朝市(万津町)など、市や市場が根付いた街であり、昔から対面販売を通して世代を超えたコミュニケーションが行われてきた土地柄です。

今回の特集では新旧の佐世保の市を取り上げ、市だからこその楽しさや、それぞれの市で活躍している人たちからのメッセージなどをお伝えします。

テントが軒を連ねる早岐茶市独特の風景。佐世保景観100選にも選ばれています。

早岐茶市

初市　5月7日～9日
中市　5月17日～19日
後市　5月27日～29日
梅市　6月7日～9日
問い合わせ
早岐商工振興会
☎38・1503

❶❷❸ことしの早岐茶市の様子。西海市、五島市、嬉野市などから毎年茶市に通うベテラン出店者の皆さん❹早岐商工振興会会長・福留武親さん❺❻ことしの早岐茶市のにぎわい

400年の歴史を持つ、市内最大の市

5月の初市、中市、後市、6月の梅市と、ことしも早岐茶市は多くの人でにぎわいました。海の物と山の物の物々交換から始まった早岐茶市は、すでに400年以上の歴史があり、佐世保の初夏の風物詩となっています。期間中、早岐瀬戸沿いには市内外から集まった約350軒の出店が連なり、海産物、農産物、日用雑貨など多彩な商品が並びます。出店数や来場者数からも、文字通り佐世保で一番大きな市と言えるでしょう。

対面販売の楽しさと触れ合い

ブルーシートやテントを張り巡らせた瀬戸沿いの道は、毎年茶市を楽しみにしている人々であふれます。箱の上にベニヤ板を乗せただけの簡素な売り台に、採れたての野菜や貝を並べて売っている高齢の出店者に声を掛けると、約50年もの間、通っているという大ベテランばかりでした。

「毎年同じ場所で商売しよるとよ。同じ人が楽しみにして買いに来てくれるけんね」と、西海町の農家のおばあさん。

早岐商工振興会の福留さんも「茶市のお店には、それぞれ顧客がいるんですよ。毎年同じお店で同じ物を買う。そこには人同士の温かな交流があり、対面販売ならではの良さがあります。茶市の大きな魅力の一つです」と、ことしのにぎわいを嬉しそうに見つめました。

活気ある市を続けるために

「いつもは静かな早岐のまちが、茶市のときは人でいっぱいになります。そんな光景を見ることが本当に嬉しいし、運営する側としてやりがいを感じます」と、福留さんは続けました。

長い歴史を持つ早岐茶市ですが、その運営には現代ならではの悩みもあります。マイカーの増加による駐車場不足、出店者と地元運営者の高齢化や後継者不足など…。歴史ある市を今後も続けていくためには、運営の中心となる地元商店街のさらなる活性化が必要です。市の期間外にも日ごろから商店街を訪れ、交流したり、情報を共有したりすることなどが望まれています。

取材日　5月27日

戸尾市場街・野田屋本店の野田さん。いつも変わらないやさしい笑顔で迎えてくれる

戸尾市場街

営業時間、店休日などは店舗により異なります（おおむね9時～17時、日曜休み）

「市民の台所」と親しまれてきた昔なじみの常設市

戦後の混乱のさなかから、市民の生活を支えてきた戸尾市場街は、中央戸尾市場、西海市場、とんねる横丁、三角市場の4つの市場が集合した商店街。まちなかにありながら、今もその風景にはどこか昭和の面影が残っていて、懐かしさを感じます。買い物ついでの立ち話や茶飲み話に花が咲く人情味あふれる光景は、なじみの店・なじみの客という関係が息づき、昔ながらの商店街の温もりが感じられます。

店先に見る「旬」で、季節を感じられる場所

最近は季節を問わずいろいろな物が手に入るようになりました。しかしこの通りを歩くと、店先に並んだ野菜、魚介、果物、花、丁寧に作られた和菓子などから四季や暦を感じることができ、旬を楽しむきっかけがあちこちに散りばめられています。その品ぞろえと新鮮さから、飲食店の日々の仕入れに使われることも多いようです。

写真は戸尾市場街の皆さん。パック詰めではなく量り売りに対応している店もあるので、単身や家族の人数が少ない場合も必要な分だけを購入できて便利

「今、なんのおいしかと？」
「今日は小佐々のハマグリが入っとるよ！」
こんな会話も市場だからこそ。おいしい食べ方も、その場でプロに聞くのが一番です。

市場で地元の魅力を再確認

戸尾市場街を歩くと、たくさんの発見があります。珍しい食材や日用雑貨はもちろん、時々テレビで見掛ける防空壕（ごう）跡を利用した奥に長い店の造り。商品を作っているところに出会い、その工程を教えてもらえることもあります。また、雑談の中から「おばあちゃんの知恵袋」とも言えるような生活の知恵を教わることも。

観光地としても根強い人気の戸尾市場街。そこには、便利さばかりを追い求める今の世の中で、見過ごしてしまいがちな地元の魅力、人から人へ受け継がれた物や教えが息づいています。それは大人だけでなく、一緒に買い物に行く子どもたちにも良い刺激となり、社会科見学のような楽しみを与えてくれることでしょう。

取材日　5月28日

佐世保朝市

日　時　月～土曜3時～9時
場　所　万津町73
せり市　第2・4土曜6時30分から
問い合わせ
佐世保朝市事務所
☎22・9890（9時まで）
※おすすめ商品やイベント情報などをホームページ（http://sasebo-asaichi.com/）で紹介中。

❶～❺朝市に並んでいる食材❻佐世保朝市運営委員長・辻山弘昇さん❼第2・4土曜のせり市の様子。申し込み不要で、誰でも当日参加できる

佐世保名物、朝市

早朝、まだ暗い時間に始まる朝市は、市民だけでなく観光客や近隣市町からの仕入れ客まで多くの人に愛されている、佐世保を代表する市です。朝市の始まりは戦前の市営桟橋（万津町）付近といわれ、現在の地に移転したのは昭和46年。以来、屋根付き駐車場の敷地内で鮮魚や青果、花、天ぷらや漬物などの加工品が、毎日露店スタイルで売られています。また、朝市の新鮮な食材を使っている食堂もあります。「出勤前に朝市で朝ごはん」などは、市民ならではの楽しみ方かもしれません。

元気な市場は人とまちを元気に

朝市の一番のおすすめポイントは、何と言っても新鮮さ。跳ねて水しぶきを飛ばすほど元気なウチワエビを見られるのは、朝市ならではの光景かもしれません。水揚げされたばかりの魚、採れたてのツヤツヤした野菜や果物を前に、店主との会話も弾みます。

「おまけしとくけん！」

そんな嬉しい一言に、早起きして良かったと思わず笑みがこぼれます。

朝市の運営委員長、辻山さんにお話を伺うと「ヨーロッパでは都会の真ん中に市が立って新鮮な食材が売られているでしょう。この朝市も、させぼ五番街の裏手に位置し、繁華街もすぐ近く。近辺には個性的なお店も増えました。朝市の敷地内には、仕入れの業者だけでなく誰でも入れるし、少量買いもできるので、新鮮な食材を家庭料理に生かしてほしいです。食は元気の源。元気な市場は人やまちを元気にします」とのことでした。

朝市に参加しませんか

朝市が一番盛り上がるのは、第2・4土曜日。鐘の音と法被（はっぴ）を着たスタッフの威勢の良い掛け声が響き、せり市が始まります。申し込み不要で参加でき、とにかく楽しめる上にお得なせり市。ぜひ一度挑戦してみてはいかがですか。

また、毎週土曜は一般参加が可能なフリーマーケットも開催中（要申し込み）。朝市で自分のお店を出すことができます。

取材日　5月30日

野菜びいき市場

日時　毎月第3土曜（7月は19日に開催します）10時～12時
場所・問い合わせ
草加家（重尾町210）
☎38・3808
※駐車場は、広田地区公民館をご利用ください。

❶野菜びいき市場の主力メンバー。一番左が草加家・高木龍男さん❷❸試食品や振る舞いを食べる子どもたち❹～❼販売されている商品の一例。ほかにその日の食材を使った、手作りみその風味豊かな「元気汁」の振る舞いも人気

作り手の思いが詰まった小さな定例市

月に一度、たった2時間だけ行われる市が口伝えで広まり人気を集めています。ことしで3年目になるこの定例市「野菜びいき市場」は、「食」に深い思い入れを持つ生産者や加工者が開いています。

売ることより、伝えること

この野菜びいき市場のけん引役、草加家の高木龍男さんにお話を伺いました。

「野菜びいきのメンバーは、みんな良い物作りをしています。でも無農薬有機野菜も素材にこだわる加工品も、一般的に売られているものに比べると価格が高い。それを売るためには、子どもにも理解できる分かりやすい言葉で商品を説明できなければなりません。素材や作り方、どうすればおいしく食べられるのか…。でも始めた当初はみんなそれを話すことが下手だった。それで、毎月『おいしい見本帳』という冊子を作って配ることにしました。書き出すことで自分の仕事に改めて気付き、お客さまに伝える方法が身に付くからです。野菜びいき市場は、もちろん売ったり買ったりする場ですが、同時に良い物作りをする若手生産者の思いを伝える場でもあるんです」

市で、ちょっと心豊かな生活

テントの下に長机、その上に商品や試食品が並んだこの市は、売り手と買い手だけでなく、売り手同士、買い手同士の距離が近いため、自然とコミュニケーションが生まれます。気軽に話せる信頼できる店で、信頼できる物を、作り手から直接買う。そして、買い物を通じた会話の中から、お互いに良い情報を得ることができる。それは早岐茶市をはじめとする、昔ながらの市に見られる光景と同じです。

お金と引き換えに品物を受け取り、同時に人同士の触れ合いや、買った物をより大切に使う気持ち・方法も教えてくれる、そんな「ちょっと心豊かな生活」が付いてくるのが市ならではの楽しみであり、人を引き付ける理由なのかもしれません。

取材日　5月17日